

《書評》

『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：
オルタナティブな社会の構想』

牟田和恵*編、キム・ヴィクトリヤ**ほか著、松香堂書店、2022 年

劉 宇 婷†

本書は、大阪大学人間科学研究科教授である牟田和恵の定年退職を機として、牟田ゼミで学んだ若手研究者の論稿を編んだものである。女性と政治・ジェンダーと政治の関わりを新たな視点から構築しようとする試み、家族のオルタナティブな在り方、そして性愛の規範や性暴力、ハラスメントに抗する挑戦などの内容が含まれている。執筆者それぞれが自らの研究テーマに即して執筆した各論文は、フェミニズム・ジェンダー研究をめぐって、異なる研究視座から論じている。全体として、ジェンダーの視点から新たな社会・オルタナティブな社会を構想するものとなっている。

本書は 11 章（終章も含め）と 3 つのコラムから構成される。14 名の執筆者が以下のように執筆を分担している。

はじめに（牟田和恵）

第 1 章 ケアの視点から再考する政治と「エンパワメント」（元橋利恵）
——トレンド化した「ジェンダー平等」の批判的検討を通して

第 2 章 選択的夫婦別姓反対論にみる性差別／ミソジニー（鈴木彩加）
——制度導入“不要”論に着目して

第 3 章 クオータと女性運動（村上彩佳）
——日本でクオータを推進する「Q の会」に注目して

コラム 1 フェミニズムとわたし（しらゆき）

第 4 章 友情結婚と性愛規範——日本における仲介事業者の調査から（久保田裕之）

第 5 章 〈恋愛伴侶規範〉の限界と新たな関係性構築の可能性（岡田玖美子）
——婚外恋愛ドラマ『昼顔』のヒットからみえるもの

第 6 章 日本と韓国の国際結婚をめぐる状況（キム・ヴィクトリア、イエム・ナタリア）
——旧ソ連出身女性に焦点を当てて

* 大阪大学名誉教授

** 立命館大学国際関係学部准教授

† 同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

cybj0406@mail2.doshisha.ac.jp

第7章 コレクティブハウジング居住における子どもの育ち（稲見直子）

——コレクティブハウス秋桜を事例として

第8章 教育期の子育てとジェンダー（藤田嘉代子）

コラム2 結婚をめぐる葛藤について——「家族になります式」を通して（玉城福子）

第9章 現代日本社会の「同性愛歓迎ムード」に潜む差別の危険性（元山琴葉）

——マイクロアグレッション概念を鍵として

第10章 インターセクショナリティ概念によるスクール・セクハラの新フレーミング（トリシア・

アビゲイル・サントス・フェルミン 翻訳：山田祥子）

——中学校における ALT を標的とした生徒からのハラスメントを事例として——

コラム3 男ではない男を求めて——宝塚歌劇と歌仔戲の人気の影に潜むもの（東園子）

終章 なぜセクハラ性暴力にこだわるか——教育、研究、裁判の40年（牟田和恵）

紙幅の関係ですべての内容を細かく取り上げることはできないが、以下では、各章の内容を簡潔に紹介する。

第1章では、フェミニズムの運動や理論が脱政治化され既存の政治や経済のサブトピックとして下位に位置づけられる現状の枠組みを乗り越え、日常的なケアの実践に根差したオルタナティブな政治観を構築していく必要性を論じている。「第4波フェミニズム」とも呼ばれる2010年代半ば以降のフェミニズムの展開を概観し、声を上げだした女性たちの困難、また運動としての課題を確認したうえで、近年の女性の「活躍」や「自己解決のエンパワメント」について批判的な論点を取り上げた。

第2章では、朝日新聞社が実施した「夫婦別姓ウェブアンケート」調査（2020/12/24～2021/1/7）のデータを用い、選択的夫婦別姓へ誰が・なぜ反対しているのかを明らかにした。また、ミソジニーという概念を導入して、選択的夫婦別姓反対派の記述を考察してきた結果、夫婦別姓というジェンダー化されたニーズはそもそも聴かれておらず、ニーズ自体が過小評価されていることが明らかとなった。また、コラム1「フェミニズムとわたし」の第3節「夫婦別姓とわたし」と読み合わせるとさらに知見が深まるだろう。

第3章では、日本でジェンダー平等な民主主義政治を実現するためには、クォータが必要だと論じ、その導入のために女性運動が重要だと指摘した。女性が政治分野で過少であることがどのように問題提起されたのかについて述べ、そして、クォータの導入を促す要因として、①政治的トップのリーダーシップ、②国際的な伝播とプレッシャー、③女性運動の3つがあげられた。さらに、日本でクォータ制を推進してきた「Qの会」に着目し、Qの会の強みと意義を示唆した。

第4章では、性愛関係を特権化する結婚制度にとって矛盾含みの実践として、近年注目されている「友情結婚」（恋愛感情のない異性同士による結婚）に着目し、都内の友情結婚仲介事業者の4名のスタッフに対する聞き取り調査から、日本において友情結婚が求められる背景（友情結婚を求めるのはどんな人々か？どんな理由で友情結婚を求めているのか？）を明らかにした。友情結婚を直接に扱った研究が日本では数少ないなか、本章は重要な一步を踏み出したとはいえよう。改めて、現代社会における結婚の形の多様性を感じた。

第5章では、表象分析の方法を用い、2010年代半ば以降の婚外恋愛への社会的注目のなかでヒットしたドラマ『昼顔』の物語に着目し、その背後にある恋愛結婚をめぐる人びとの意識との関連か

ら、その物語にはどのような意味が読み取れるのか、視聴者から婚外恋愛物語への支持と否定の声を取り上げた。さらに、〈恋愛伴侶規範〉についても再考してきた。近年『昼顔』のような婚外恋愛物語の意味とそのヒットから、近代化に伴う成人間の豊かな関係性構築のありようについての指摘はとても興味深い。

第6章では、日本と韓国における国際結婚や統合・多文化政策について、旧ソ連出身の結婚移民女性の経験を文脈に論じている。彼女らの事例を取り上げたことで、社会的統合が「円滑」「複雑」「困難」それぞれのモデルに分類された女性像が鮮やかに描き出されている。評者には、最も印象深く、かつ新たな洞察を得た点としては、高学歴の女性が国際結婚において社会的統合が「困難」になる傾向があることである。

第7章では、北欧発祥の多世帯・多世代を特徴とする共同住宅のひとつであるコレクティブハウス秋桜での参与観察データと、秋桜在住の夫婦5組を対象に行った半構造化インタビューデータを用い、子どもが親以外の他者とも共住する環境下でいかにして育つのか論じている。安全な居住空間や信頼できる他者が存在しているため、子どもは親以外の人たちとの関わりが増える分、親との関わりが相対的に小さくなり、その結果、子どもが積極的に人間関係を築くことと、子ども1人1人が個室を持つことによって、自律的かつ自立的に育つことが可能になった。さらに、コレクティブハウジングという新たな暮らし方の意義も示唆した。

第8章では、ジェンダーの観点から、親たちが学校教育期の子どもたちをどのようにサポートしているかについて考察した。男性の育休取得の推進などで父親が子どもをケアし接することがその後の良好な父子関係の形成につながるということが認識されるようになったが、子どもが学齢期に入ってからケアやサポートが必要だとの指摘が興味深い。一見、豊富な研究があるように思われるが、実は家族社会学でも教育社会学でもそれほど蓄積がない現状である。そのなかで、本章は、教育期の子育てを真にジェンダー平等化していくための議論を提供しているといえよう。

第9章では、非異性愛者とその家族への聞き取り調査および当事者やその家族の支援団体における参与観察をもとに収集した執筆者の経験から、メディア、家庭内、学校や職場での事例を紹介しながら、「同性愛歓迎ムード」が醸成される現代日本について、マイクロアグレッション概念を通して批判的検討を行った。さらに、その批判的検討を通して、日本で「見せかけの人権意識」が出来上がっていること、そして、それ自体が差別の再生産につながる危険性を孕んでいることを可視化し、マイクロアグレッション概念を起点とした多様性尊重社会の可能性について示唆している。

第10章では、学校で生じているが実際は不可視化されており、したがって現在の教育方針では大部分が解決されていない特定のセクハラの状態、すなわち、生徒によるALT（外国語指導助手）へのセクハラを取り上げている。女性のALTが実際に中学校の生徒から受けたハラスメントの事例を検討するにあたり、インターセクショナリティを分析レンズとして用いたことで、教員という指導的立場にあるにもかかわらず女性のALTがセクハラに対して特に脆弱になってしまうことが明らかとなった。したがって、今後、性別に基づく差別や暴力のない多様で包摂的な社会を目指すならば、社会制度、とりわけ学校が直接的および間接的に性差別に加担する仕方を常に警戒し、批判的でないといけないと示唆している。

終章では、牟田和恵氏がセクシュアル・ハラスメント、性暴力とかかわってきた40年近くの研究や教育の歩みを振り返る。日本でセクシュアル・ハラスメント概念が知られていない時代に、前例のない福岡セクハラ裁判にかかわり、以来「常識」とのたたかいを続けてきた。「セクハラ」の言葉

の誕生、福岡裁判の勝訴、男女雇用機会均等法の改正、大学におけるセクハラ防止への取り組みなど、「リアル」だからこそその力を感じた。このような経過を読むと、評者は背中が熱くなってきた。自分にもできることは何かを考えはじめた。そして、セクハラや性暴力にこだわる理由については、構造的な女性差別の深淵への挑戦を、社会構造自体を変革していくドライブとすることができないか、と述べる（155 頁）。牟田和恵氏個人のバイオグラフィーと 40 年間にわたる日本のフェミニズム・ジェンダー研究史が見事に連動していることを示している。

本書は、各章のみならず、コラムも含めて非常に面白いという点も、その魅力の一つである。コラム 1 においては夫婦別姓が認められていない視点から、コラム 2 においては異性愛を強要する視点から、現在の婚姻制度のあり方の問題点を指摘した。そして、論文より自由度の高いコラムから、牟田ゼミの、現実に妥協しない、制度に束縛されない「自由な精神」を読みながら感じていた。しらゆき氏の言葉を借りて言えば、「〔わたしの人生は〕順風満帆ではなかったけれども、知性を力に変えてしなやかに「生き延びる」ことはできました。フェミニズムの学問としての「底力」はそこにあるのだと思います」。フェミニズム・ジェンダー研究が存在感を失いつつある現在、「生きる」力に変えるということはこの学問が存在する理由の一つではないだろうか。

本書の特徴として、執筆者それぞれの専門分野や取り上げたテーマは多岐にわたるが、本のタイトルでもある「オルタナティブ」というキーワードは一貫しており、新たなフェミニズム・ジェンダー研究のアプローチが次々と連想され、重要な気づきを盛り沢山に与えてくれた一冊である。こうした論文集スタイルの専門書の場合、自身の研究関心がある章だけ読むという読者が多いと思う。評者も、通常ならそうしたスタンスで本書を手にとったかもしれないが、今回は書評をすることがきっかけで通読したところ、非常に刺激的な読書体験をすることができた。また、評者自身も、牟田和恵氏の後ろ姿を見て、フェミニズム・ジェンダー研究に微力ながら近づきたいと考えている。